

令和7年度第2回小諸市総合計画審議会 議事概要

令和8年2月12日（木）開催

開催日時 令和8年2月12日(木)午後3時00分から
開催場所 小諸市役所3階 第3・4会議室
出席委員 西村廣一、小山真紀、柳澤よし子、竹花長雅、依田利宣、坂口健之
八木澤一朗、手塚光太、後藤理恵、
以上9名(欠席委員:小山田武、横山郁子、以上2名(敬称略))

1 開会 (進行：企画課長)

2 あいさつ

(小泉市長)

皆さんこんにちは。

大変、お疲れ様です。令和7年度の第2回総合計画審議会にご出席を賜りまして、委員の皆様ありがとうございます。本題に入る前に、私の方から3つの資料、中身は同じものですが、お話しさせていただきます。1つは県が出している毎年1月下旬に発表される前年の人口動態についてです。2025年1月1日現在の人口は4万274人でしたが、2026年1月1日までの1年間で、増減でいくとマイナス260人となりました。自然増減で言うと、自然減が440人。これは実は過去最大の下げ幅になっています。主な原因は、死亡が651人と非常に多く、前年の579人から600台中盤まで増えたことが言えます。出生については県のデータで211人でした。私が就任した2016年は302人でしたので、この10年間の間に約100人近く、子供が生まれなくなっている世の中になっていると言えるのかなと思います。

昨日、記者会見を行いました、「ルナルナ」というアプリを運営する会社から提案があり2年間、連携協定を結ぶことになりました。女性の周期的に的確に合わせることで自然妊娠率を高める取り組みで、小諸市でも年間30人ほど出産数が増える可能性があると言われていています。本来は月額400円の個人負担があるコースを、2年間小諸市民の方は無料で利用できます。昨年が211人ですので、250人台まで回復できれば非常にありがたいと考えております。

一方で、資料の横を見ていただくと、社会増の増減はプラス178人になっています。6年連続で社会増、要は転入超過の状態が続いています。小諸市は他の市と違い、日本人がプラス180人(外国人はマイナス2人)となっており、日本人の転入超過が特徴です。また、内部調査によると、転入者の73.6%(1,366人)が39歳以下であり、若い人たちに選ばれている町だと言えます。「田舎暮らしの本」という雑誌のランキングでも、人口3万から5万人未満の市で総合12位、若い世代・単身者では15位となっています。

前置きが長くなってしまいましたが、今日の審議会でありますけど、3つの重要な事項についてご審議をいただきたいと思っています。1つ目は動物園の改修事業の進行管理及び評価であります。小諸市総合戦略に基づいて地方創生交付金を活用して、動物園の改修工事をこれまで実施してまいりました。懐古園内にある動物園は、学ぶ、遊ぶ、楽しみが揃った貴重な施設であり、特に子育て家庭にとって、小諸市のみならず近隣自治体において大切な財産であります。本日はこの事業の進行管理と評価をいただくと共に、来年度実施する動物園開園100周年記念事業の概要についてご説明をしたいと思います。2つ目であります。学校再編事業の進捗と跡地利用についてであります。現在本市では、芦原中学校、坂の上小学校、水明小学校、千曲小学校の4つの小中学校を統合する学校再編事業を重点的に進めて

おります。この事業は子供たちにとってより良い教育環境を整備するための重要な取り組みであります。本日は、事業の進捗状況と統合後の小学校の施設の跡地利用の方針についてご説明をいたしたいと存じます。3つ目です。第6次総合計画の策定方針についてであります。いよいよ、12年に1度の総合計画の基盤であります第6次基本構想の策定フェーズに入っております。来年度は評価の年になりまして、今後の計画期間は人口減少が本格化していくことが予想される中で持続可能な地域をどのように作っていくか、最も重要な期間となります。そういった状況の中から審議会の委員の皆様にもお力添えを賜り、計画を策定していく必要があると考えておりますので、本日はその策定方針をお示しいたします。結びになりますけど、本日も審議いただく内容、子育て環境の充実と観光振興の両面で重要な役割を果たす動物園と、まちづくりの根本である教育、そして今後12年間のまちづくりの指針となる基本構想という、いずれも市の未来を左右する重要なテーマでありますので、本日委員の皆様から頂いたご意見やご議論を、次年度の事業実施の参考とさせていただきます。限られた時間ではありますが、忌憚のないご意見、積極的なご議論をお願いしたいという風に思います。少々長くなりましたがよろしく願いいたします。

(西村会長)

改めまして、こんにちは。

忙しいところに集まっていたいてありがとうございます。今日はたまたま午前中、私が住んでおります狭山市で協働推進協議会というのがありまして、その副会長をやらせていただいております。それに出てまいりました。協議事項の1点目です。協働推進という形で市民と行政がどのようにいろんな形でやっていくかということですが、市民提案型と行政提案型の協働推進事業について令和7年度、8年度の議論をしました。

2点目です。小諸も市民大学というのがあると思うんですけど、著名な方に講演をいただいて見識を深めていますよね。一方、狭山市の市民大学は事業自体を市が直接運営しております。1年間休校して昨年10月から新たに始まり、「教養学部」と「コミュニティデザイン学部」の2つが動いていますが、今日の午前中はその進捗状況について話を聞きました。

冒頭に言いました協働推進事業、それから市民大学。この2つの究極の目的は何だろうとずっと電車の中で考えていました。最終的には、我々自身が将来を託す子供たちに、どうやったら良い制度を残せるのか、どんな仕組みを残せるのか、どんな気持ちを我々が後に残していくのか。それが多分、一番の目標じゃないかなと、そんなことを考えます。

ということは、この総合計画審議会も同様に将来を託す子供たちのために何を残し何を引き継いでいくのかになってくると思っております。先ほど市長から今日やるテーマを話していただきましたけれども、そういった見地を心に置きながらぜひ議論していただければありがたいと思っております。本日はよろしく願いいたします。

自己紹介（第1回欠席者）

（後藤副会長）

皆さんこんにちは。副会長を仰せつかっております後藤と申します。コミュニティテレビ小諸のキャスターを務めております。総合計画審議会の委員は、前回から引き続きという形になります。西村会長のもとで、市の総合計画と一緒に皆さんと審議してまいりたいと思います。微力ではありますが、小諸市の発展のために、お役に立てればと思っておりますので、今後も引き続きよろしくお願いいたします。

（竹花委員）

お疲れ様でございます。竹花でございます。長野県パトロールでございます。今回、商工会議所副会頭として参加させていただくことになりました。ご意見聞きながら、率直な提案をさせていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

3 協議事項

(1) 小諸市動物園開園 100 周年記念事業について

（事務局が資料に沿って説明）

（委員）

全国のどこか動物園を視察されましたか。100周年という節目が大事なのではなく、そこをきっかけに、さらに新たな動物園のあり方や発展が大事だと思います。動物は命ですので、そこが一番気になります。

（事務局）

動物園の再整備をしていくにあたっては、県内外の動物園に出向いて視察をしながら、特に我々が意識したのが「動物福祉」です。今までのように展示して人間が見学するだけではなく、動物が過ごしやすい場であることを大前提に考え、他の園がどのような形でやっているのかを見学した上で設計に活かしています。例を挙げますと、第1期で造ったペンギン舎については、生息地の再現に加え、足の裏にタコなどの病気が出ないように中に芝生を貼る工夫をしました。これから導入するアルパカも、屋内は過ごしやすくしますが、屋外については南米アンデスの岩場を再現した放飼場を作り、動物の生態に合わせています。他園の事例を研究することは非常に重要だと感じており、今後も継続していきます。

（委員）

視察という点では、旭山動物園へは行かれたか。

(事務局)

旭山動物園へは我々としては行っていません。

(委員)

あそこは1990年代に閉園の危機もありましたが、結果的に日本一の入園者数を記録しました。当然、動物のための施設もそうですが、私が取り入れてもらいたいのは「サポートクラブ」です。「旭山サポートクラブ」というものがあって、個人なら年間3,000円、法人も1万円から10万円といったランクがあります。なかなか来られないけれど、応援したいという気持ちを持っている人はいます。そういった人たちのためにサポートクラブを作ることで、イベント時だけでなく、平常時のファンをいかに維持するかが大事です。成功例であるあそこの仕組みを聞くと非常に参考になると思いますので、継続的に応援してもらおうファン作りの仕組みとして提案します。

(事務局)

応援団がいることは非常に心強いです。一人で場を作るのは難しいですが、市としてそういう場を作るということだと思いますので、前向きに検討させていただきます。

(委員)

開園にあたり駐車場の問題がすごく出てくると思うんです。ものすごい人数の方が来るとは思いますが、今の状況では足りないのではないのでしょうか。いかがでしょうか。

(事務局)

おっしゃる通り、繁忙期には駐車場がかなり飽和状態になる状況が見られます。現在、第3駐車場にあった古い建物を撤去しており、それによって駐車台数が20台から30台規模で増える見込みです。また、桜まつり等の期間中には、南城公園に臨時駐車場を設けてシャトルバスで送迎するといった対応も検討しています。大手門駐車場や駅前駐車場、市役所周辺の駐車場への誘導も的確に行いながら、駐車場不足にならないよう対応していきたいと考えています。

(委員)

小諸の動物園を思った時に、規模感では到底他の動物園には敵わない部分があります。例えば軽井沢のピッキオさんのように、野生動物を観察するツアーには県外の人たちからの需要も高いです。せっかく小諸には浅間山があり、自然に生息している動物たちがたくさんいます。山に登った人しか見られない生態を動物園で説明できたり、自然学校と動物園が連携したり、「浅間山の動物たちと連携している」という一連の繋がりができれば、お金をかけずに小諸の自然を活かした動物園にできるのではないのでしょうか。都会の人たちには、

タヌキがすぐそこに生息していること自体が珍しいはずです。

(事務局)

実は再整備計画を作るにあたって、里山の動物、地域の動物の飼育場所を作るという項目があり、第3期整備で実施する予定です。カモシカなど小諸周辺固有の動物を導入することを予定していますが、現在は他の事業との兼ね合いで、しばらく経ってから開始することになっています。ただ、先行してタヌキやキツネなど元々いた動物も飼育しています。タヌキなどはSNSに載せるとすぐに1万ビューを超えるほど人気が高いです。地域にどんな動物がいてどんな生態があるのかを説明し、皆さんに伝えていくことを大事にしながら動物園を運営していきたいと思っています。

(会長)

100年も続いて全国で5番目に古いという歴史は、小諸が抱えている宝物です。この宝を大事に守り、より広めて行ってほしいと思います。事項1はよろしいですか。次は芦原新校についてお願いいたします。

(2) 芦原新校について

(事務局が資料に沿って説明)

(委員)

教育委員として関わっておりますが、ずっと先のように感じていた開校が10年4月に迫っていていると感じます。まだ決めなければならないことがたくさんありますが、保護者の意見を直接聞く場を作っても、来てくださる方が限られています。地域の方が自分たちに関係ある学校として参加してもらえるようなアイデアがあれば教えていただきたいです。

(委員)

全国では1年生から9年生まで同じ学校に通うようなこの形の学校ってあるのですか？事例でこうなのでやっていきますって、ちょっと事例をもう少し示していただければイメージが湧くかなと思います。

(事務局)

全国に義務教育学校は増え続けておりまして、もう300近いと思います。長野県でいきますと小諸が6校目という形になります。

ただ、残念ながら長野県で開校してる義務教育学校は小さい村、町が多いです。小諸は今回、芦原中学校校区全ての小学校3校と中学校1校を1校にして、最大で今のところ開校

当時では900人ぐらいの児童生徒数になるんですが、こういった例は県下にはございません。初になります。

全国に我々よりもまだ2倍近い学校が存在してるんですね。小学校の1年生から6年生、中学校の1年生から3年生。義務教育学校はすごくフランクに「1年生から9年生」と言ってますけども、全て同じ校舎の中で生活をいたします。小中一貫教育9年間を貫く学習をしていくことによって、今社会でも求められている人間を育てるため最善だろうという判断です。これについては一番子供たちの近くで見ている先生、市内の校長先生8人も全ての統一した見解です。

義務教育学校のいいところは、同じ校舎の中にいますので、小学生の年代と中学生の年代が交流ができるということです。各先進事例を見ますと、例えば中学生の生徒が、年下の子供たちと同じ校舎にいますので、優しくなったりとか、そういった気持ちが芽生える。小学生は、やはり今まで小学校6年生がその学校で一番最年長なんですよ。なんだけど、さらに上にまだ中学1年から3年もいますので、憧れっていうんですか、そういったことが助長されるようなことがあります。

ただそれはメリットだけでなく、デメリットもちろんあるんですが。デメリットの中で一番言われてるのは、例えば義務教育学校は9年生が卒業ですので、6年で卒業という節目がないです。したがって、なんとなく6年生が、一番小学校で言うとお兄さんお姉さんっていう自覚が、薄れてしまうっていうことがあります。先進の学校ではそういったことを防ぐために、一旦その区切りとして、小学校の修了式のような形で、意図的に儀式を設けて、6年生のモチベーションを保ったりしている学校が多いです。

義務教育学校ならではのなんですよ、学年区分ですね。通常、6年・3年の「6・3制」なんですよ、それが全部義務教育課程まであるので、例えば「4・3・2」という区切りも可能なんです。どうしてそういう考えがあるかというと、小学校の高学年、5年生、6年生は、今の小学校の担任の先生がそれぞれ全部の教科を教えるっていうことより、中学に行くと教科担任制がありますので、その専門の先生に教えてもらった方がやはり効率もいいんですね。したがって、高学年は中学の先生が教えるようなイメージになると「4・3・2」という区切りが理想的と言われております。それも義務教育学校にすることによって、そういった運用が可能になるというメリットもございます。

小諸市では、今回の小学校の統合も踏まえる中で、同じ敷地内に増築・改築を加えることによって建築することが可能という方針が見えてきましたので、だとするならば、小中一貫教育のメリットが一番大きい義務教育学校にしましょうという形で、来ているという状況でございます。

(委員)

これプラスはすごくあると思うんですよ。ただマイナスもすごくあって。その具体的な

そのマイナス事案は把握していますか？

私の業界で考えた時、性犯罪。あと暴力事件。そして事故。だから例えば中学生同士でバタンとぶつかっても、それはそれでその程度で終わると思うんですけども、小学1年生と、全力でこう中学3年生が走ってて、そこに小学校1年生がいたら、事故になりますので。

性犯罪は、非常に盗撮が増えてます。小学生でもスマホ持ってて、仕掛けてという事件が実際、長野県内でも起きてます。

(事務局)

確かに可能性はゼロではないと思います。小諸市と同規模の義務教育学校を視察してまいりました。義務教育学校にしたことによって懸念されるようなことを質問はしてみたんですが、とりあえず今のところ、そういったことは、ないと聞いています。

一緒になったことによって懸念されるのが、例えば中学生の生徒が保健室を利用するケースと、小学生が保健室を利用するケースで、明らかに使い方が違います。個室を作っておいて、目が触れないような形で相談に行けるとか、そんな配慮もされているという話は聞きました。したがって、それも先進事例から学ぶ1つの事例ではありますから、その配慮も今回の芦原新校について設計には活かしています。

(委員)

私は現在、銀行に所属しておりますが、「統合準備委員会」という言葉を聞くと、銀行での支店統合などの苦労を思い出し、非常に大変な作業だと実感しています。実体験から申し上げますと、こうした委員会で多様な意見をすべて吸い上げるのは、現実的には極めて困難です。ただ、今回配布された「お便り（統合準備委員会だより）」を拝見すると、これほど定期的に情報を開示しようとする姿勢には、事務局の大変なご苦労と情報公開への責任感を感じます。

意見の集約方法についてですが、対面の説明会だけでは参加者が限られてしまいます。今はデジタル技術がありますので、YouTubeでの動画配信や、保護者世代には紙媒体よりもLINEなどを使ったアンケート方式で意見を集めるなど、あらゆる手段を講じる必要があるのではないかと感じました。

(委員)

現在も紙媒体（お便り）でしっかり発信されていますが、それを見る方と見ない方の差があると感じます。教育委員会の皆さんは非常にお忙しいとは思いますが、SNSの活用も一つの策です。例えば、先進地の事例についても、現地に行くのは経費がかかりますが、リモートでインタビューを行い、メリット・デメリットを語ってもらったものをYouTubeや番組で配信してはどうでしょうか。「準備会でどのような意見が出て、それに対してどう答え

たか」を映像で示すことも、市民の関心を高めることにつながります。報道機関としても、報道を通じて協力していきたいと考えています。

(委員)

一点気になったのですが、実際に教育を受ける「子供たち」の考えや意見は聞いているのでしょうか？ 学校を使いやすくするのは子供たちが一番の目的であるはずですが。統合準備委員会のメンバーは大人であり、教室から離れて何十年も経っています。今の子供たちの感覚や資質は変わっていますので、実際に新校へ通う子供たちの課題や意見をまとめ、それを次の東中学校校区の再編にも活かしていくべきだと思います。

(事務局)

ありがとうございます。委員のご指摘通り、統合準備委員会の名簿には子供は入っていませんが、設計を固める前の段階で、子供たちが理解しやすいように校舎の模型を作成しました。この模型を統合対象の4校で順次展示し、子供たちに「ここはこんな使い方ができるんじゃないか」といった意見をアンケート形式で聞きました。すべてを反映できるわけではありませんが、「子供ならではのいい視点だ」と思える意見もあり、設計に反映させた実績もありがとうございます。

(委員)

ありがとうございます。私は生産設備の導入などの仕事もしておりますが、多くの人意見が入ると、コストやスケジュールの管理で頭がいっぱいになってしまいます。計画段階でできることには限界があります。プロジェクトが前に進みません。計画は「ほどほど」の段階で実行に移し、実行中に出てくる課題を一つずつ解決していくというスタンスが必要です。最後に振り返りを行い、目的を達成できるように進めていただければと思います。

(会長)

他にございませんか？ 市として「小中一貫」で行くと決めた以上、全国の成功事例をどんどん市民に発信しながら進めてください。私は個人的に小中一貫教育には大賛成です。子供一人ひとりの能力は千差万別です。その能力を見つけ、伸ばすことが教育の使命です。1年生から9年生まで同じ環境で見守ることで、教員が子供の長所や課題を長期的に把握でき、その情報を9年間しっかりと引き継いでいくことができます。これこそが小中一貫の最大の利点だと思いますので、ぜひ着実に進めてください。

(3) 芦原中学校区学校再編に伴う小学校跡地活用について

(事務局が資料に沿って説明)

(委員)

進め方について、私はよろしいんじゃないかなと思います。多様な意見を集めるステップを踏んでいただいて、その上で叩き台になるような活用方針を示していただき、さらに多様な意見をいただいて叩いていくというステップになるんだろうなと思います。次予定されている民間の声もお聞きしてというところで、それが商売目線であっても地域の発展・活性化に資するような話は、私はいい話だと思いますので、その可能性も持っていくのは本当によろしいんじゃないかなという感想があります。

(委員)

今、小諸がすごく盛り上がって元気が出てきたのも、内うちにいた我々ではなく、外からの視点や外の人たちのアイデア、勇気が大いに反映されたからだと思つづく感じます。今後の予定にある民間事業者へのヒアリングを、内うちの細かいところではなく、もっと大きなところに網をかけて、外から企業誘致をしたり外の資本をどんどん小諸に入れたりすることで、中が活性化していくんじゃないかと思います。地元でワークショップをやっても出てくるアイデアは大抵今まで聞いたことのあることばかりなので、そこよりももっと違うアイデア、東京で活躍しているITベンチャー企業などの声が入ってくると、もっとワクワクするものになると思うので、もっと外に目を向けていっていただきたいなと思っています。

(会長)

ありがとうございます。世の中がどうなっていくか読めない中で、企業のあり方や働き方も変わってきています。アンテナを高く張っていただいて、外部の知恵を見つけてやっていければありがたいなと思います。

(委員)

今回いただいたアイデアの次の展開はないんですか。とりあえずワークショップでアイデアを聞いただけですが、この中にはすごくいい意見や答えがいっぱい入っていると思います。これを逆にぶついたり、公募したり、さらに限定してワークショップをやったりといった次の展開はお考えですか。

(事務局)

活用方針案ということで、まずはいただいたご意見をもとに、この学校については「民

間での活用を基本として考えていきたい」といった大まかな方針を示していきたいと考えております。来年度の予定ですが、民間活用を基本に考える学校について、「校舎を活かしてどのような事業ができるのか」という民間事業者さんからの具体的なアイデアをいただくための「サウンディング型市場調査」を、夏から秋にかけて実施することを予定しております。その中で、実際に出していただいたご意見に合うような提案がされればいいですし、それ以外にもっといいアイデアが企業さんから出されれば、それを具体的に活用案につなげていければと思っています。幅広くアイデアを募っていければと考えております。

(委員)

アイデアを聞いて終わりにするのではなく、出した人も非常に気持ちを込めていると思いますので、それをつなげていく形にしていきたいです。ワークショップが第1段階で、それが洗練されていくステップを踏んでいただければ、アイデアを出した人のご苦労も生きると思います。例えば「養殖場」などは、これからは陸上養殖の時代だと言われていきますので、すごいアイデアだと思います。ぜひこのアイデアを活かすように次のステップをお願いします。

(委員)

この事業の最終的な判断者はどなたになるのでしょうか。行政が決めるのか、それとも市民が決めるのか、どちらになるのでしょうか。

(事務局)

案を作るのは行政ですが、最終的な判断は市民の代表である議会が、それを認めるかどうかという形になります。

(委員)

資料を拝見しましたが、あと2年間で決めなきゃいけない。校舎が完成して実際に移るまであと2年ですので、まずタイムスケジュールをしっかりと決めないと、このままズルズルいくと決まりません。決まらないでそのままのつぶてになって、建物がどんどん老朽化していくのが一番怖いです。今は広く意見を求められているところなので意見を集めるのはいいんですが、「コンセプトとしてどうしたいのか」という叩き台がないと議論につながっていかないかなと。コンセプトそのものは「行政はこう考えます」という案でよくて、「皆さんどうですか」と問いかけていかないと、広い意見のまま平行線で行っちゃうんじゃないかと思いますので、市としてどうしたいんだというのをアピールされた方がいいのかなと思いました。

(事務局)

市で事業や施策を進める時、市民の皆さんとコミュニケーションを図って進めていかなければなりません。その手法として、今回は白紙状態で地域の皆さんとコミュニケーションを図っていこうという手法にしました。叩き台を示して意見交換をする手法もありますが、それだと「もう答え（やりたいこと）は決まっているでしょ」と言われてしまうことがあります。幸いまだ少し時間がありますので、今回は丸っきり白紙の状態で行っていきたいということです。これからステップを踏みながらだんだん精度を高めていき、最終的には叩き台を市が示して議論をしていく、そんな形で進めていくのがいいかなと考えています。先ほどある程度時間があると言いましたが、どこら辺までに決めるかというのをしっかり定めながらやっていかなければいけないと思いましたが、そんな形で行きたいと思えます。

(委員)

白紙の方向で行かれるということで、全然いいかなと思います。そういう形で進められているということをご説明いただきましたので承知いたしました。

(会長)

他にはよろしいですか。時間が経ってききましたので、この事項はこれで終わりにしたいと思えます。

4 その他

第6次基本構想及び第13次基本計画 策定方針について

(資料に沿って事務局が説明)

5 閉会